

大学の世界展開力強化事業（平成 29 年度採択）中間評価結果

大 学 名	千葉大学
整理番号	AR01
事 業 名	極東ロシアの未来農業に貢献できる領域横断型人材育成プログラム

大学の世界展開力強化事業プログラム委員会における評価

総括評価 B	当初目的を達成するには、助言等を考慮し、より一層の改善と努力が必要と判断される。
<p>コメント</p> <p>本プログラムは、日本とロシアが共同で未来農業のスペシャリストを育成することを目的としている。</p> <p>採択後にロシア側の省庁分割や許認可体制の大幅な変更、州知事の交代による農業近代化や施設園芸に関する優先順位の変更など、プログラムを実施していくための整備が困難な状況にある中でも交流学生数の数値目標を達成しているほか、フォーラムやシンポジウムを通じて教員や研究者、企業関係者の交流の素地作りを進めており、評価できる。また、植物工場を活用した人材育成など、極東ロシアとの農業分野における共同教育という観点で大きな意義があり、実現した場合には、未来社会に大きな貢献が期待できるプログラムであると言える。</p> <p>一方で、プログラムの開設準備が遅れていることから、取組は計画どおりには進んでいない。二国間でのカリキュラムの調整・整備や単位互換について質の保障に向けた具体的な方策の検討やインターンシップの見直し、育成を目指す人材像とプログラム全体の構想との関係の明確化などについて、早急に対応していく必要がある。</p> <p>交流学生数について、平成 30 年度までは全て 3 か月未満の留学とする計画に沿って目標は達成しているものの、学部学生の派遣については単位の取得を伴わない短期のものが多く、また、食料生産から流通・販売ビジネスまでを含めた未来農業を体現できるスペシャリストの育成を目標としているが、受入学生の専攻領域は農学に関係しないものの割合が高く、偏りが見られる。</p> <p>さらに、学部、修士、博士課程を有機的に結び付けるサンドイッチプログラムとしての機能を最大化させるべく、大学院生の交流に関する取組について設計を見直すことも必要であろう。加えて、日露双方とも英語によるコミュニケーションが難しい状態にあるなど、当初より懸念のあった言語の問題を解決しプログラムを軌道に乗せるとともに、学生の人材育成プログラムとしての枠組み作りに繋がる取組を進めていくことが求められる。</p> <p>最後に、今後も補助期間終了後の安定的な財源確保に努めるとともに、学内や関係機関との質保証を伴う国際教育連携の推進と将来の我が国の更なる発展に向け、積極的にプログラムを展開していくことを期待する。</p>	